インディスティンクト＋Q

第1話　工作員、標的は身内

庫発りべるき

〈はじめに〉

本編をお読みになる前に付属の利用上の注意をご確認ください。

〈本編開始〉

工作員――この言葉から人々は何を思い浮かべるだろうか――

特定の国家や組織のために裏で行動する者――そう思われることが多いであろう。

スパイ――この言葉からも似たようなことを思い浮かべる、なんてこともあるだろう。

だが、ここで述べた定義に当てはまらない、それでいて工作員やスパイなどと呼んでもよさそうな者もいたら――

二十八歳の男がいた。

何気なくテレビのニュースを見ている。

あるところで三十六歳の男性が起こした事件を報じていた。

その男性は自分の父親の兄の男性（七十二歳）と、その妻の女性（七十一歳）を包丁で刺して、二人とも死亡させたという。

男性は両親と三人で住んでいる。

警察の調べに対し男性は、その夫婦が自分とその両親にたびたびトラブルを引き起こし、先日も口論を吹っかけられてついにブチ切れたのだと動機を語っているという。

自分の怒りを徹底的に分からせたかったとも語っている。

その供述を裏付けるかのごとく、二人の遺体はズタズタという言葉が合うほどに深い刺し傷がたくさんあったという。

大量出血で死亡させるには十分だっただろう。

――幾度と無く親族に敵対行動を取られ、ついに抹殺にまで至る、か。

残念なことにこういったことも世の中起こることがあるのも事実である。

それどころか実の親子間であっても殺し、殺され……ということさえ起こることも。

残念なこと、か。

ニュースを見ていた二十八歳の男は何か考えている。

一体自分は何を考えているのか、というより、男はおおよそのことは分かっていた。

自分の考えは決していいこととは言えないということが。
というより、どうみてもろくな考えではないだろうということが。
男は憂鬱な気分で毎日を過ごしていた。
敵対する自分の親族に対する、その者たちへの効果的な怒りの伝え方。それがわかればいいのだが……そんなことも考えていた。
奴らが生きている。それだけでイヤになる。
そいつらは……一人は男の母親の姉、五十六歳。もう一人はその夫、五十九歳。
現在は奴らとは、親戚付き合いは無いと言えよう。
それについては男はこう思っていた。
――全部、お前達が招いた結果じゃないか。
男の親族すべてがこんな輩というわけではないが……不届きな親族のおかげで疲れてくる。
母の姉とその夫は、男とその家族にとって災いの種だった。
その者たちがこれまで取った言動は、その者たちの存在自体が男をしんどくさせる要因とさせるには十分だったと言えよう。
そして男はこんなことまで考えている。
敵と化したわが身内よ。いい加減にしてもらいたい！そして――
決着を付けたい！
このまま奴らを生かしておくのもイヤになる。
そして――
ついに「工作員」が動き出した。それは男自身だった。
どこかの国家や組織に命じられたわけでも、金で雇われたフリーのスパイでもない工作員。
自分やその家族を苦しめる親族どもの抹殺を計画し、指令を送る。
自分自身に、である。
もちろん指令（依頼）内容は、自分の親族の中にいる複数の敵対者を…である。
標的は男の母の姉とその夫である。
母の姉とその夫はこれまで男の両親につらく当たってきた。
ささいな落ち度で過剰に責め立てることもあったし、どう考えても言いがかりとしか思えないようなことで「攻撃」してくることもあった。
男は苦しめられた末の両親の苦痛の表情を長きに渡って見てきた。
少年だった頃その表情を見つつも、何とかしたいがどうすればよいのかという思いもあって、それが男の精神に毒素のように染み込んでいったものだった。
今となってはどうだっていい。男はそう思っている。

どうせ奴らにはそれ相応の代償を払わせるのだから。
注意点があるとすると、確執については世間に公知であるということである。
標的の始末は二人同時が理想である。二人のうち一人にでも何かあれば自分が真っ先に疑われるだろう。
一人だけ始末するともう片方を始末できないうちに警察にマークされ、逮捕ということになる可能性が大きい。
あれから一年、か。男はあることを思い出していた。
一年前、母の姉が言いがかりに等しいことで口論を吹っかけてきた。
男は思った。また、やりやがった、と。
そしてこうも思った。もう、ウンザリだ、とも。
言いたい放題の末母の姉が帰ってからわずか数十分後、男は母の姉の家に突入するかのように車で向かっていった。
そこは人口密度が低い、周囲に田畑が多いところ。車で行けば男の自宅からそんなに遠くない。
そこら中に聞こえるであろう大声で、強い口調でこう言った。
「伯母さん、出て来いよ！」
母の姉が出てきた。今度は怒りの、というより言いがかりの矛先を男自身に向けた。
「何しに来たのよ！あんた！」
にらみつけた相手に男は言った。
「言っとくけどな、そこまで怒鳴りつける以上、ある程度理由が無ければ伯母さんが悪いってことになるんだぞ！」
男はさらに続けた。
「名誉毀損って言葉を知っているか？人のことを散々ボロクソに言う以上、相応の理由がないと正統な言論って認められないって意味だよ！
いつも人のことをあれこれ言ってる以上、伯母さん自身は当然、その程度のことはわかってるはずだと思ってるんだがな！
最低限度の知識としてな！」
母の姉はにらみつけるような、それでいて、何か戸惑っているような表情をしている。
そして別の方向から男性のものと思われる声が聞こえてきた。
それは男に向けられたものだった。
「あのさ、俺の妻…年のせいかもしれないけど…ここ最近具合が悪くなることが多くなっているんだ。だから…ついイライラしてちょっとしたことで怒鳴ったりしてしまうんだ」
その男性は母の姉の夫だった。
その声に男が答える。
「おじさん、病気で苦しんでる人だったら何をしても許されるわけではないだろう。
それにだ、あなた達がしでかしてきたことは、あなた達が元気だった頃から長きに渡ってだろうが！病気関係ねえ

だろ！

この質問にはっきり答えてくれ。暴言や暴力なんか無くてもできると思うんだがな！」

男はこう考えている。ごまかすにしてももっとマシな言い方は無いのかよ、と。

それからしばらくその場に居合わせた全員が沈黙。結局、双方が、不本意だったのかもしれないが妥協してその場を収めることになった。

その後、男はさっさと帰った。

そして「奴ら」はそれ以来、男とその両親のもとに来ることはなかった。

「奴ら」には息子が一人いるが、親とは離れたところに住んでいる。息子も今回の騒動を知っているかもしれない。ただ、息子も男と関わりたくなかったのか、男のもとへと来ることはなかった。

世間にもこの騒動は知れ渡ったが、男の母の姉夫婦があれだけのことをしたのだから、こんな出来事が発生しても不思議ではない、として、たいした騒ぎにはならなかった。

だが、男のわだかまりはこれで終わったわけではなかった。

時間が経てば自然とわだかまりが解ける、なんてものでもなかった。

度を越した恐怖心や嫌悪感を植えつけられた場合、時間が経てば自然にどうにかなるものでもない。どうしても影響が残ってしまうケースも少なくない。

男が考えていたのは、世間の目を引くような行動をとったのだから、何も無い限りしばらくはおとなしくしていよう。それだけだった。

あれから一年経った。男とその周辺についての世間の目はある程度は落ち着いてきたであろう。

そう考えた男が今いるところは、郵便局。

封筒に入ったいくつもの郵便物を局員に見せる。そして…

「配達日について、この日でお願いしたいのですが…」

男は局員に送り先への到着日を尋ねる。局員が答える。

「わかりました」

目的の日に送ってもらうよう申し込んだ。料金がかかるが……まあいい。目的のためだ、妥協しよう。男はそう思った。

その後、郵便局を出る。

そして次の日…

男は、かつて乗り込んだあの家に向かって車を走らせていた。

両親には会社の人たちと遊びに行くと言って家を出た。行き先で泊まってくるとも告げた。それを前提とした荷物も持っている。

ただそれは、偽装工作に過ぎなかった。

適当なところで時間をつぶす。そして、真夜中を迎える。
目的地の家に着いた。男の母の姉と、その夫が住む家。
適当なところに車を止める。
息子さんが奴らと離れて住んでいることは幸いだったな。
男はそう思った。
別に奴らの息子が男から攻撃されるほどのヒドイことをしたわけではないのだから、標的にしていない。
標的以外を巻き込まなくて済む。
男はすかさず窓ガラスを割る。そして、家の中へと侵入。
というより、突入と言ってもいいくらいの勢いだった。
物音に母の姉が目を覚ました。そして男を見て叫ぶ。
「な、何なの？！」
「もう、何もかもイヤになったよ、伯母さん」
疲れたような声を出す男が手にしている物――それは一丁の拳銃だった。
すかさず男は相手の腹に向けて発射。相手はその場に倒れこむ。
「次はあんたの夫の番だ」
宣言するように叫んだ男は辺りを見渡す。そして家中を探す。
車庫を見る。
（車が無い！）
そうか、確か母の姉の夫はある工場で働いていたな。
交代勤務でいない可能性が高い。ならば、長居は無用だ！
男は倒れている母の姉を見る。母の姉は細い声で言った。
「お、お願い、助けて……、もし、私に至らないところが……あれば……」
「今さら謝られても遅い！」
男は強い口調で一言告げた。そして静かにこう言った。
「あんたの言動による父さんと母さんの苦痛の表情を見るたびに、いつか俺がこうするときが来るのでは、と思っていた」
言い終わった直後に拳銃を一発発射。
それからあっという間のことだった。男の車がその家を離れていったのは。
やがてその家に少しずつ人が集まってきた。大きな物音がしたことで目を覚ました人が続出したのだ。
人々の中にいる一人の男性が家の中を覗き込む。そこで見たものは――
「た、大変だ！」
覗き込んだ先にあったのは、腹部からの出血と……頭に尋常でない穴をあけられた女性の姿だった。
もう息がないであろうことを思わせる状態で――
そのころある工場に一台の車が近づいてきた。
運転しているのは、先程自分の伯母を抹殺した男である。
その工場では夜間の防犯体制上、門が閉められている。
用件がある人のため開けられるようにはしてあるとはいえ

防犯体制上、不審なことをすればすぐに発見されるであろう。
もっともそれを気にするような男ではなかった。門を開けた後、すぐに車を進入させる。
「何事だ？！」
不審な行為を目撃した工場関係者らしき者が叫ぶ。
（騒ぎになったが、まあいい。ここを突破すれば標的まであと少しだ）
男は車をすぐに停車させ、エンジンを切らずに車から飛び出すように降りていく。
そして慎重に工場内に入っていく。
工場内でもざわめきが起こる。男の手に拳銃があることで、工場関係者をより一層動揺させている。
男はさりげなく銃口を見せ付ける。作業員達をけん制するかのように。
（いつまでも長くはいられない！早く奴を、母の姉の夫を探し出さなくては）
男は周りを警戒しつつ、標的を探す。しかし、見つからない。
この工場は二階建てとなっている。もしかして――
そう思った男は工場内の階段を駆け上がる。
二階に上がった時点であたりを見渡す。
――奴がいた！
男の標的である、母の姉の夫の姿が見える。
しかし、男はまだ攻撃しない。
自分の銃の腕前はお世辞にもうまいとは言えない。
母の姉の場合、至近距離だったから簡単に命中できた。
しかしこの距離では……
やがて標的となった本人は工場の騒ぎの原因となった男の正体と尋常ではないその様子から、標的が自分であることに気が付いた。
そして標的が逃げ出した。
（逃がすものか！）
男が追う。そして弾が逸れても他の者に当たらないタイミングをうかがう。
（今だ！）
男は標的に向けて何発も発砲する。しかしなかなか当たらない。
そんな中、弾が思わぬところに当たった。
男も標的も気付いてはいなかったが、赤い金属製の大きな箱らしき物に何発か当たっていた。
さらに発砲を繰り返すと、次の瞬間――
大きな轟音とともに、あたり一面、火の海となった。
赤い金属の箱状の物にはこう書かれていた。
「危険物保管用」
引火性が高い物が入っていたようだ。
銃弾によって金属の入れ物はおろか、中の危険物の容器まで穴が開いた。

それにより容器から内容物が漏れ出し、そこに銃弾が当たったショックで引火したのだ。
爆発を思わせる出来事がたまたま逃げる標的のそばで発生したため、標的は驚いてつい動きを止めてしまった。
そして男も動きを止めるがすぐに我に返り、チャンスだと思い標的を撃つ。
倒れこんだところで頭に何発も穴を開けるように追い撃ちをかける。
そして男は標的の頭に開けた穴を確認する。
辺りは標的の血液で真っ赤になっている。それも、見るものに恐怖を与える色に――
それを確認した男は、次にある方向へと足早に向かっていった。
工場内にある消火器を手に取り、先程火を吹かせたところに向かっていく。
工場への巻き添えは最小限度に、と思った男の行動だった。
幸い規模がそんなに大きくなかったため、すぐに鎮火できた。
――これで、後始末も終わったな。
男は満足感と寂しげな様子が入り混じった表情をしている。
工場周辺は騒然となっている。作業員などの関係者が逃げ出してきている。
男は拳銃を見つめていた。そして標的たちの始末を決心してから今までのことを考えていた。
銃を使ったのは自分の変なこだわりからだった。
どうせ奴らをやるなら自分をある種の工作員にしてみようと考えた。
そして標的の始末を、言い方が悪いが見世物にしようと銃器を使うことまで考えた。拳銃は密売ルートから購入した。
自分の主張を世間に大々的にアピールするためには相当インパクトがあることをしなければならないとも思っていた。
殺人事件でも程度しだいでは自分が満足できるほど注目が集まらないだろう、なんてことも考えた。
事件を起こす前にニュースで見た、三十六歳の男性のケースもそれなりに世間の注目を集めてはいたが、自分が身内と戦うならそれより大きな注目は集めたかった。
ただ、これらの考えや思いと同時に、我ながらなんて乱暴な考えだろう、と自分自身に不快感も感じていたが。
男は自分の頭に銃口を密着させる。そして――
工場内では銃声が一回だけ聞こえた。
それから少しの日数が経過。テレビのニュースでは男が標的を始末したことが大々的に報じられた。

男が母親の姉夫婦を銃で射殺したこと、そして――夫のほうを抹殺した後、犯行に使った銃で自らの頭部を打ち抜いてそのまま死亡したことも。

さらに男が、全国の報道機関に犯行声明と思われる文書を送付したことも世間に知れ渡るようになった。

警察が郵便局の関係者に男の顔写真を見せて話を聞いたところ、男が配達日を指定した上で各報道機関に文書を送るよう注文したことを覚えていた職員がいたという。

犯行声明には男が自分の母親の姉夫婦の抹殺を決心した理由の他、銃器を使って殺害するつもりだったことも書かれていた。

声明では男は自らを「工作員」と表現するところも見られた。

暗殺や破壊行為をおこなう工作を自らおこなう、という意味で。

そして男は自分のことをこんな言葉で表現していた。

自分は「インディスティンクト　＋（プラスキュー）　Q」となったのだ、と――

そして、事件を捜査することになった警察署では――

「なるほど、まさか我々の所轄でこんな『工作員』が現れるとはな」

工作員というと普通は特定の国家や組織など、ある程度大きな規模の機関が関わって秘密裏に行動をする者をさすことが多かった。

ただ、秘密裏の行動といっても必ずしも大規模な機関に関わらなくてもできることがある。

規模によっては計画から実行まで単独で実行できるものもある。

単なる犯罪行為を行った者、と言えばそれまでかもしれない。

いつからこんな言葉ができたのか、誰も知らない。

ただ、行為の内容自体に工作活動・破壊活動的なインパクトを与えた者がこんな呼ばれ方をすることがある。

インディスティンクト＋Q、と。

インディスティンクト＋Q――

インディスティンクト（indistinct）、英語で形状などが不明瞭な、といった感じの意味がある。

＋Qについては、クエスチョン（question）から、人々がいろいろ追求してみたくなるほどの興味を寄せ付けてしまう要素も含まれるといったことを表すようだ。

すべてがそうというわけではないが、インディスティンクト＋Qと呼ばれる者の中には、作戦の実行後、失敗した場合のみならず成功したとしても、寂しげな様子で自らの手で人生を終わらせる者が少なくない。

それも人々の興味を引きやすくなっている。

工作員という表現が適切かどうかわからない形式で、かつ工作員のようなインパクトを与えるほどの言動を取った者をこう呼ぶようになったと考えられる。

但し本職の工作員が任務に従って行動した場合でも状況しだいではインディスティンクト＋Ｑと呼ばれることもある。

そういったところでは定義があいまいなところもある。

警察署では男が起こした事件についての話が続いている。

「とにかく、二十八歳の男が自分の母親の姉夫婦を殺害した今回の事件の場合でも、インディスティンクト＋Ｑと呼ばれることになったな」

（終）

著者　庫発りべるき
発行　データコーディネートフォルダー
二〇一四年九月八日

(C)　Kohatsu Riberuki